

中長期目標 (学校ビジョン)		夢や希望に向かい 自分らしく輝いて たくましく生きる力を育む			今年度の 重点目標	・一人一人の生活や可能性を広げる多様な学びの推進 ・安全・安心な教育環境の整備・組織体制 ・地域連携、保護者連携の強化 ・校内組織力の強化と業務改善			
年 度 当 初								(2)月	
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
各学部の取組	小学部	自分らしさを発揮し、 願いを抱き意欲的に 学ぶ授業づくり	・児童の実態に大きな幅があり、重度の児童も多い。 個々の実態やニーズを適切に把握する難しさもある り、関係機関からの助言や、教員個々のノウハウを生かした研修を積み重ねながら職員間で情報共有し、 実践の質を高めていく必要がある。 ・学部通信や学部懇談で進路に関する話題を交えて 伝えたり進路に関する情報を提供したりしている。 ・各クラスの授業実践を共有する機会として、実践紹 介や使用している教材、教室環境を紹介し合う勉強 会や、事例を交えた進路・キャリア研修会を開催し、 職員間で情報を共有したり、キャリア教育について考 える機会を設定したりしている。	児童の実態を保護者と共有し、次のステッ プ(願い)に向けて適切な目標設定、支援・ 授業を行っている。	・児童の実態やニーズについて保護者から細かく聞き取 るとともに、意見交換をしっかりとしながら教育支援計画の 作成にあたり、保護者や関係機関と情報共有する。 ・懇談や参観日などで、継続して保護者に進路やキャリア 教育に関する例や情報を提供していく。 ・視覚障がい、聴覚障がい、発達障がい等、経験者のノウ ハウを生かした研修や、実践の中で児童の反応を、どのよ うに捉えるのかといったPDCAサイクルの視点で実践紹介 しあう機会を月1回程度設定する。	・児童の実態やニーズについて保護者と情報共有を図 り、進路懇談等で進路についても話し合った。 ・実態に合わせたグループ学習や交流学习への参加が でき、児童理解や学習成果が見られつつある。 ・学級通信や廊下掲示で、他学級の様子を知ることが増 えた。教育支援計画・指導計画の検討会をグループで 行うことで、実態把握や目標検討が充実できた。 ・情報共有システムの利用で子どもの様子を共有できる ことも増えてきたが、1組、Ⅰ型、Ⅱ型と教育課程が違う児 童の様子や取り組み、子どもへの関わり方について、もっ と情報共有できるとよかった。 ・学部会を活用して必要な研修を行うことができた。研修 日を予め決めて実施できるとよい。	B	・児童理解を深めていくために、実態やねらいにあわせ たグループ学習を継続する。 ・児童の実態や目標、学級の様子、授業のねらいなど共 通理解する機会(単一会・重複会)を定期的に開催す る。 →単一会・重複会の記録も回覧し、学部全体で情報共 有する。 ・連絡事項等は掲示板等を活用し、学部会の時間を有 効活用する(研修や情報交換など) 関係機関との連携で得た有用な情報については情報共 有システムを活用して共有できるようにする。	
	中学部	自己実現に向けて、 一人一人の実態や課 題に応じた授業づくり	・各教科の理解度や障がいの程度など、生徒の実態 差が大きい。 ・生徒理解のために単一会や重複会を行っている が、授業予定や連絡事項について話し合われること が多く、授業を通した生徒の変容や各授業の評価・ 改善について話し合われることが少ない。 ・教科指導や自立活動の専門性向上、効果的なICT 活用、実態に応じた教材・教具の活用など授業力向 上に向けた努力が必要である。 ・進路学習について、様々な状況に応じて学習内容 を考え、計画的に実施することが必要である。	・職員、生徒の8割以上が生徒自身で すべきことを考え行動することができ たと感じている。(単一) ・職員、保護者の7割以上が、生徒の 実態や生活年齢に応じた学習や適切な 集団学習の工夫ができたと感じてい る。(重複)	・日々の実践につながる学部研修を行う。また、定期的 に単一会や重複会を実施するとともに、教材の是非や各教 科の生徒の変容などを話し合う時間を設定する。 ・生徒がすべきことを自分で考えられるよう、指導と支援、 受容と許容のバランスに留意する。 ・生徒一人一人の病気や障がいに 応じた適切な支援を行うために、保護者・関係機関との連携を深める。	・(単一)生徒指導に関して、学部職員でこまめに情報共 有を行い、必要であれば管理職も含めて協議も行った。 教師と一緒に生徒自身で振り返ることが増えてきた。職員 、生徒の8割以上がすべきことを考えて行動でき始め たと感じている。 ・(重複)実態に応じた単元設定や教材教具の工夫など 改善すべき点はあるが、年間を通して集団学習について 話し合いながら行うことができた。職員、保護者の7割以 上工夫できていたと感じている。 ・(共通)学部研修を実施したり中学校のエキスパート教 員公開授業へ参加したりして日々の授業づくりに活かす ことができた。	A	・(単一)教師とのやりとりだけでなく、生徒同士で問題解 決できるような場面設定やできた際に称賛する声かけな どを行っていく。また、基礎学力定着のため担任と教科 担当が密接に連携していく。 ・(重複)各学習のねらいを職員間で共通理解して指導 できるよう、事前事後の確認を徹底する。生徒数に応じ て効果的な学習になるよう、グループ分けを行いながら 指導する。 ・(共通)単一会や重複会などの定期的な会をより効果 的な会にできるよう内容を吟味する。また、職員のニーズ に応じた学部研修を継続して行う。	
	高等部	生徒のキャリア発達を 支える授業づくり	・学部会・単一会・重複会の情報共有、また、生徒の 実態把握や授業の工夫・充実に向かう体制ができつ つある。 ・昨年の取り組みを継続しながら、生徒が自分の力を 発揮する活動につながる授業づくりに努めることが必 要。	・的確な実態把握、生徒理解のもと、生徒 が自分の力を発揮できる授業づくりに努め ている。	・キャリア発達、生徒一人一人のキャリア教育目標につい て共通理解をする機会を設ける。 ・単一会、重複会や子どもを語る会、掲示板利用等で情 報交換を行い、生徒の実態把握や授業の充実(教材の工 夫や体験・集団活動の工夫・ICTの活用)に努める。 ・体験学習や集団学習について、3年間の学びに継続性 を持たせることで見通しを持って計画・実施できるようにす る。 ・主事、副主事が中心となってニーズを把握し、職員研修 (全体、単一会、重複会)を実施する。	・高等部勉強会を5回実施した。今年度は、学部外からも 専門性の高い職員に講師として協力してもらい、自立活 動や授業づくり等について学びを深めた。より実践的な 研修ができるようニーズの把握や研修の方法について検 討が必要である。 ・情報共有や研修・検討等で、電子会議室の活用には至 らなかった。 ・2年間の学びの継続性についてまとめることができた。 ・研修したことや情報共有したことを授業づくりに活かし たり、情報交換する時間を積極的に作ったりするなど、教師 個々の意識の向上はみられた。しかし、教師間の意思統 一に不十分な面があった。	B	・情報共有や研修・検討等で、掲示板や電子会議室の 利用についてはさらに工夫が必要である。 ・積極的な情報システムの活用や研修の充実を図る。 (キャリア教育関係は毎年必ず行う。) ・様々な活動や研修等、教師個々で意識を高くもって取 り組めるよう、主事・副主事が連携して教師のニーズを把 握したり、柔軟な対応で見通しの良い環境づくりをしたり する。 ・高等部3年間の学び(外部講師との関わり)についてま とめる。	
可能な一人一人の生活や 様々な学びの推進	教務部	各種計画類の様式整 理	・昨年度個別の教育支援計画、個別の指導計画、年間 指導計画等の様式の見直しを行い、今年度から新 様式を運用することになった。作成の流れや学習へ のつなげ方、具体的な進め方等についてはまだ浸 透していない部分があり、一つ一つ確認をしながら 進めていく必要がある。 ・重複学級においては、指導計画において今年度か ら教科ごとの目標設定、評価となり、より教科を意 識した授業づくり、評価をしていく必要がある。	・個別の教育支援計画、個別の指導計画、 年間指導計画の作成や具体的な流れにつ いて整理され、スムーズに運用されている。	・新様式での作成の意義について確認しながら、個別の 教育支援計画、指導計画、年間指導計画作成の流れや 手順を具体的に示していく。 ・目標設定や評価等について、随時確認して共通理解を しながら進めていき、各種計画類がより使いやすいもの となるよう必要に応じて改善を図っていく。	・個別の教育支援計画、指導計画、年間指導計画の作 成前に、具体的に手順や確認事項を提案し、共通理解 するようにしたことで、スムーズに次年度にむけた計画 の作成を進めることができていた。また、職員からの疑問 や意見に対して分掌部会で検討して伝えるようにしてい く中で、新様式についての理解も深まり、少しずつ浸透 してきている。目標検討会の流れについては、自立活動部 と相談をしながらより取り組みやすい方法について探っ た。新しい取り組みも入ってきているので、今年度の反省 をして、次年度につなげていく必要がある。	B	・年間を通して出た質問等を分掌部会で再度確認をし てまとめ、次年度につなげていく。 ・今年度新しい取り組みとなった目標検討会の流れにつ いて反省をし、改善点について検討する。	
	まなびのプロジェクト	授業づくり	・とりよう学びのプロジェクトは、それぞれの分掌や教 職員が児童生徒の学びの充実を図りたいという思い をより効率的、効果的に実現するために検討を行う。 (月1回程度)	・各研修会や書き物のスケジュールの情報 をまとめて職員に提示する等の工夫をし、 職員が働きやすく学びやすくなる。 ・学校裁量予算指導充実費戦略事業にプ ロジェクトで検討した内容を踏まえ、予算化 を図る。	・全分掌の参加メンバー構成の見直し ・研修会の持ち方や各分掌事業の調整を行う。 ・予算要求等の基本的なところから参加者で一緒に考 える。 ・「初めての先生でもすることが分かる」「教材研究や研 修の時間が持てる」等の働きやすい学校に向けてとりよ うのトリセツの充実等を図る。	・年間を通じて、年度当初の計画に沿って、それぞれの 分掌等に働きかけながら、課題解決を図ることができた。 ・グランドデザインを作成した。	A	・引き続き学校課題の解決や職員の働きやすい環境等 に向けて、先生方の意見を聞きながら、プロジェクトを 進めていく。 ・次年度の学校課題や学校経営の重点に応じてメン バーの構成について検討していく。	
	教育企画部	自分らしさを 実現する キャリア教育の推進 児童生徒会活動の 活性化	・年度当初、進路指導主事が各学部で進路・キャリア 教育に関する研修を実施し、共通理解を図ってい る。今年度からキャリア教育の評価がキャリアパス ポートや個別の教育支援計画の評価に代わる。 ・様々な制限の中で児童生徒が活躍したり、交流し たりできる機会が減少したが、委員会活動やわくわ くフェスタに関して生徒主体の意見が上がってきて いる。今年度は初の児童生徒役員選挙が実施とな る。	・キャリア教育に関する学び合いを通 し、7割以上の教職員が他の学級や学 部の児童生徒の取組や変容、成長を認 め合う声かけができる。 ・児童生徒会活動に関して「次は～し たい」「自分も～してみたい」等と新 たな夢や目標を持つ児童生徒が増え、 次期役員候補者が出る。	・キャリア教育の視点や発達段階の目標を確認しやす い表にまとめ、個別や集団活動で育てたい力の意識付 けや職員間や保護者との共通理解を促す。 ・学部主事や進路指導主事等と連携し、研修内容の共 有や学部間の研修、キャリアパスポートを見合う機会 等を設け、学び合いや情報の共有を図る。 ・児童生徒会に関するプレゼンや動画を作成し、選挙 への参加を促したり、児童生徒会への関心を高めたり する。 ・文化的行事を児童生徒会活動と結びつけ、主体的な 活動の機会の保障、チャレンジへの認め合いにつな げる。	・職員研修の講義や卒業生インタビューを踏まえ、育 てたい力について学部間で協議できるようにした。本 校のキャリア教育の視点の改定を授業づくりの参考や 保護者研修会での提示につなげたが、児童生徒の変容 等を共有できる機会の設定は不十分だった。 ・文化的行事の進行や企画、挨拶運動等、児童生徒 会が全校の場で活躍する機会を設けることで、児童生 徒会アンケートでは、活動への達成感や次期立候補 への関心が表れた。委員会合同の募金活動も意欲的 に参加する姿が見られた。	B	・キャリア教育の視点表の活用とともに、学部間研修 や外部研修の伝達の機会を設け、職員間や保護者との 学び合いや情報共有の充実を図る。 ・児童生徒会活動をキャリア教育や人権教育等と結び 付け、担当者間の連携のもと、児童生徒が主体となる 活動や交流の実現、児童生徒会コーナーの活用をめざ す。	

年		度	当	初	(2)月			
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
	情報教育部	ICT活用(一人1台端末)	・高等部1年生・2年生が、1人1台端末の環境の導入がスタートする。現在その準備を整えている。 ・ICT機器を用いることで、学習意欲や学習理解度が高まる場合があると考えられるが、現在、ICT機器を学習で活用する方法は、職員によって差がある。	・1人1台端末の環境において、児童生徒がルールを意識した上で主体的な活用をしている。 ・ICT機器の活用において、ただ使用するだけでなく、児童生徒が主体的に活用する場面があったり、学習の困難さを手助けしてもらったりするような活用が学習の6割以上でなされている。	・分掌内で機器の使い方を学び、各学部へと広げていく。 ・新しい機器の使い方を掲示板に載せるなどして、使い方を周知していく。 ・ICT機器が活用しやすい環境整備と支援体制に努める。 ・ICTサポート支援事業との連携を密にし、ミニ研修を開いたり、授業支援を進める。	・生徒が主体的に使っている場面を教員間で共有することは難しかった。 ・終礼や学部会でICT機器の紹介をしたり、ICT支援員と連携してミニ研修を開いたりした。 ・chromebookが効果的に活用されるように、分掌会や主事主任会で使用した。 ・視線入力装置やiPadなどの新たな使い方や機器設定を分掌部員が中心になって行った。	B	・ICT機器を使う場面を設定し、教師が授業づくりや教材作成、校務に活かせるようにする。 ・新しい機器の紹介や、ICT機器の活用方法を学部会やミニ研修、終礼などを活用し行っていく。 ・視線入力装置を使った学習は、準備に時間を要することが考えられる。ICT支援員と上手く連携し、学習をスムーズに行えるようにする。
	自立活動部	授業づくり 病弱教育の強化 エキスパート教員の活用	・肢体不自由・病弱教育の基礎的な知識や実技について全職員で毎年確認するとともに、アンケートを参考に実践に結びつきやすいテーマをお役立ち勉強会等を活用して計画的に研修していたが、今年度は実施しない。また、他学部や他学習グループと授業について意見交換する機会がない。 ・経験年数、個々の専門性は様々である。基礎的な知識を押さえるとともに、身体面や認知面の指導等、職員の専門性向上を引き続き図る必要がある。また、教材・教具の活用の仕方等、職員間で情報を共有する機会が少ない。	・授業づくりに役立つような校内資源(物品やこれまでの実践)の紹介や整理整頓、実践の蓄積ができ、教職員の7割が活用している。	・校内の自立活動関連教材を自立活動教材室に集め、目的、段階別に整理する。 ・自立活動室やスヌーズレン室の物品の使用方法を一覧にまとめる。 ・写真データを活用し、様々な学習グループの様子を定期的に紹介したり、参考になる資料を紹介したりすることで授業づくりの参考にできるようにする。 ・Co-MaMeを活用できるよう研修や勉強会を設定する。 ・研修後のアンケート等で寄せられたニーズに対して、ミニ勉強会「ちょこっとLab.」や自立活動通信「MANABI」で伝える。	・自立活動室やスヌーズレン室の物品管理について、貸出方法や返却の管理も明確になった。短期の物は月末に声掛け、長期貸の物品は長期休業中に各教室で点検を行った。しかし、いまだ所在不明の物品もある。返却時期や破損等の対応、紛失等に関する啓発が必要である。また、自立活動室の遊具器具の使用方法をファイルにまとめる、物品の置き場所の工夫や整理整頓、スヌーズレン室の季節ごとの模様替え等を行い、活用される頻度が増えている。 ・職員のニーズに応じた研修を企画し運営した。今後の授業づくりに役立つようにと、長期的な視点にたった企画運営を行った。 ・実態把握のツールとしてCo-MaMeを鳥養版Co-MaMeとしてアレンジし段階的に導入した。それをもとに話し合うことで、職員同士の意見交換が活発になり適切な目標設定につながっている。何回か使用することで更に幅広く活用できることが期待でき、心の教育的ニーズに関する組織としての専門性向上の第1歩目となった。今後は利活用の幅を広げていきたい。また、教務部と連携をして検討することができた。導入後のアンケートも肯定的意見が多かった。	B	・スヌーズレン室の物品整理や季節の模様替えなどは、今後も継続していく。 ・Co-MaMeは何回か使用することで更に幅広く活用できることが期待される。目標検討会で引き続き使用を促すとともに、自己理解、自立活動の指導やケース会議等での使用も検討していきたい。 ・他の分掌と連携したり、アンケート結果を活用したりすることで、できるだけ多くの視点を取り入れた専門性向上の取り組みにつなげる。 ・職員のニーズを把握し、授業づくりの参考になるようなミニ研修会ちょこっとLab. を継続する。 ・自立活動の学習の流れ(鳥養スタンダード)を検討し提案する、自立活動の学習の実践の記録・教材の蓄積等を行い、専門性の向上につなげる。
安全な教育環境の整備・組織体制	保健安全部	○児童生徒が安全に快適に学校生活を送ることができる環境整備と体制づくり	・ヒヤリハット事例の報告は、掲示板や学部会で行うことで、教職員の意識の向上につながっている。大きな行事の時期に、レベル1以上の件数が増加した。また、ヒヤリハットの報告をするのは気まずいという雰囲気がある。 ・新型コロナ感染症の状況により、学校全体での訓練ができず、学部や学習グループでの実施になった。しかし、訓練の前後の準備や打ち合わせ、反省から挙げた諸問題の解決に向けて、避難用具や防犯用具の充実を図ったり、防災委員会と連携を図ったりした。 ・医療的ケアのある児童生徒の担任・学部主事と看護師が話し合い、双方の目標や方策を共有し、支援している。 ・教職員アンケートの「給食を活用した指導を計画的に実施できたか」の問いに対して肯定的な回答が52%であった。	・レベル0の事例報告数を増やすことで、レベル1以上が減少する。 ・防犯体制および災害時の避難経路や避難場所、救急体制が確立している。 ・教職員と看護師の双方がそれぞれの専門性を発揮し、児童生徒の心身の安定や学習への積極的な参加を通し、児童生徒の成長・発達を最大限に促すことができている。 ・教職員アンケートの「給食を活用した指導を計画的に実施できたか」の問いに対して肯定的な回答が70%以上ある。	・ヒヤリハットの報告を、掲示板や学部会で行う。 ・大きな行事の前に、口頭でも全体への意識づけをはかる。 ・レベル0の事例報告を増やす工夫をする。 ・外部機関と連携をとりながら学校全体での各種訓練を行い、避難方法を全体で共有する。また、保健安全部会で協議したことを防災委員会に報告し協議したり、設備の充実を図る。 ・外部研修や校内での研修、ケアトーク、医療的ケア等を通して教職員と看護師との連携をとりながら児童生徒の情報共有に努める。	・年間の0レベル報告数は増えなかったが、報告内容を掲示板や学部会で共有し、安全な学習の進め方を他職種で話し合う等の様子がみられた。 ・外部機関とも連携して各種訓練を行った。訓練を通して明らかになった問題点を防災委員会で意見交換した。 ・防災委員会で行くつか避難方法を提案したが、変更されたことが周知されていない。 ・医療的ケアに関して、お互い気づいたことを意見交換しケアトークや個人シート等の活用を継続していく。 ・生徒の実態把握のため教職員と看護師との連携を継続していく。 ・教職員アンケートの「給食を活用した指導を計画的に実施できたか」の問いに対して肯定的な回答が52%→68%と向上したが、目標値にはやや届かなかった。 ・献立に関する一言メッセージや食育関連行事は食に関心を持ちやすく、給食時間に活用しやすい資料提供だった。けんこうルームの配信動画については、活用している学級が少ない。	B	・掲示板や学部会での報告、ヒヤリハット川柳の取り組み、必要に応じて口頭での声かけで、ヒヤリハットの意識づけと安全対策の共有を継続する。 ・訓練を継続し、問題点を防災委員会で意見交換する。 ・避難方法や避難経路の確認を防災ウィークなど頻繁に確認する機会の設定に努める。 ・継続して、各行事の役割分担に医療的ケア担当をつける等の工夫をする。 ・教職員と看護師が意見交換できるケアトークの取組を継続し、充実させる。 ・児童生徒の実態にあった資料提供方法の検討、けんこうルームの活用を広げていく取組が必要である。
	支援部		・校内支援、教育相談に係る職員間での情報共有を図る仕組みを作る必要がある。 ・SSWの活用は進んできているが、SCとの連携を充実させる必要がある。 ・アフターケアの実施方法についての見直しや卒業生の情報が校内職員へフィードバックされていない。	・定期的な生徒指導ミーティングの開催。 ・SCによる児童生徒のアセスメント実施や児童生徒の面談回数が増加する。 ・卒業生の情報を職員へフィードバックする仕組みができる。	・隔週で生徒指導主事、校内支援主任、教育支援コーディネーター、養護教諭等が情報交換を図る生徒指導ミーティングを実施。 ・SCによるアセスメントの実施ができること等の周知やアセスメント未実施児童生徒の抽出。 ・アフターケアの記録を職員に共有する機会を設ける。	・生徒指導ミーティングにSSWも加わることで連携を強化し、様々な視点から本人・保護者への対応方法や今後の支援の在り方を考えることができた。 ・中学部・高等部1組のほとんどの生徒が1度はカウンセリングを受ける機会が持てた。SCに幅広く相談ができるよう、教室に出向いたり、気軽に話ができるような体制づくりに努めたりした。 ・アフターケアの記録について、とりようのトリセツからリンクが貼られていることを掲示板等で発信し、教職員に周知することができた。普段から意識して目にするが増えた。	A	・生徒指導ミーティングに担当者全員が参加できるように時間割調整が必要である。 ・SCとのかかわりが増えたり、SCの効果的な活用方法について周知したりするために、ニーズに合わせ、児童生徒、教員、保護者向けに研修会を設定する。 ・アフターケアについては、定期的に掲示板にリンクを貼るなどして、引き続き校内向けに情報を発信するとともに、内容に関してもケア継続の必要性の判断基準について検討し、充実させていく。

年		度		当		初		(2)月	
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
地域連携強化 保護者連携	支援部	地域からの相談対応	・就学や進学、転学に関わる相談が例年多く、学校説明会や学校見学、体験入学等の機会を通して、本校について保護者や学校関係者に正しく理解してもらう必要がある。 ・地域の学校から依頼を受けて相談にあたっており、複数で訪問したりリモートを活用したりする等、相談対応は充実しつつある。しかし、単発で終わり、次につながらないケースもあり、早期かつ継続的に支援にあたることのできるような工夫が必要である。	・学校説明会や学校見学、体験入学を通して本人・保護者、学校関係者が本校について理解を深められるような丁寧な情報提供と個別に相談できる場を設ける。 ・地域の学校のニーズに応じた研修内容の設定と、困り感に対する積極的なアプローチを行っていく。	・近年の就学に関する傾向から、小・中学校の自閉・情緒障がい、学級や知的障がい学級にも研修会の案内を行い、より多くの人に本校について知ってもらう機会を作ったり、早期かつ継続的に相談できる体制を整えたりする。 ・Classroomや研修会等を活用した情報交換の場の設定、新設学級や相談を受けた学級に対してこちらから積極的に連絡を取り、定期的にフォローアップしていく。	・センター的機能の在り方を部内で検討したり、年度内に教育相談のパンフレット等の見直しをしたりすることで、少しずつ本校について知ってもらう機会を広げる取り組みを継続している。他分掌とも連携しながらより啓発に力を入れていきたい。 ・参加人数は少なかったが、研修会の内容や発信の仕方等、地域の先生方が参加しやすい在り方を検討してきた。 ・地域の対象となる支援学級へ直接出向き、児童生徒及び担任や主任とつながることができたので、支援方法や進路について今後相談しやすい関係づくりを築くことができた。	B	・地域の学校のニーズを吸い上げ、地域から必要とされる情報提供や教育相談を行うとともに、積極的かつ困り感に寄り添ったアプローチを継続していく。 ・学校として、不登校傾向のある児童や生徒への予備的な対応、相談等についても今後、他分掌とも連携しながら進めていく。	
		校内組織力の強化と業務改善	組織の活性化 業務改善 防災体制(災害備蓄など)	多様な職種の連携が十分ではなく、協力できる余地がある。教材や文書情報等が整理されていないため、探すことに時間を要したり、活用されていなかったりしている。 災害時に避難した際の動きを想定することや、非常食の準備が十分ではないことが課題である。	・多様な職種間が連携し、年度当初よりも協力する場面が増えている。 ・教材室が定期的に整理されている。 ・文書ファイルやフォルダが定期的に整理されている。 ・災害時に避難した際の動きの想定がされ、非常食の準備が進んでいる。	・学校看護師と教職員との連携について、具体的な方法を検討し、取り組む。 ・教材室や文書ファイルやフォルダの定期的な整理方法を検討し、取り組む。 ・防災委員会で災害時に避難した際の動きの想定について検討する。 ・非常食の準備を進める。	・看護師と職員との連携として、個人シートの活用状況の把握や連携の具体例の検討し、着任職員への説明資料を作成した。 ・文書フォルダや文書ファイル棚の問題点についてアンケートを実施し、問題点について検討した。 ・地震時の避難について中央病院との協議が進み、より現実的な避難体制が整った。非常食の準備については新年度早々に進める予定である。	B	・看護師と教員の連携についてのポイントを整理し、着任者向けにポイントを伝える。 ・文書ファイルやフォルダのアンケートから、職員にアンケート結果と今後の注意点を提示する。 ・夜9時までの学校待機を想定した調査を行い、必要な備蓄品がそろよう進める。
	事務部	・災害時用物品の整備 ・保管場所の整備 ・倉庫・物置等の見える化	・災害時用物品の整備を進めているが、十分とは言えない。また、実際に持ち出しをする際に適切な置き場所であるとは言えない状況。 ・昨年度、倉庫等の整理を行ったが、職員の異動もあり、物品の保管場所が一部の職員しかわからない。倉庫の中に入らないと何があるかわからない	・災害時用物品の整備、適切な保管場所への設置 ・倉庫等保管物品のデータ化、職員間での共有	・関係部署と協議し、必要な物品の洗い出し ・災害を想定した適切な保管場所の検討、設置 ・校内物品の保管場所のデータ化	・総務部、保健安全部と協議し、災害時に必要な物品を整備した。 ・総務部と協力して、防災倉庫を整備した。 ・災害を想定して、事務室内の動きをあらためて確認し、非常持ち出し品を整備し、事務室内の表示等を行った。	B	・防災備品について、整備されている物品を一部職員しか把握していない現状がある。掲示、情報提供、訓練時に実際に発電機などの備品を使用してみるなど行う。	

評価基準 A:十分達成 B概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し
[100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]